



認定特定非営利活動法人

RASA-Japan ニュースレター

理事長 藤井典夫

〒468-0014 名古屋市天白区中平2-2627

Tel/Fax 052-803-1649

<http://rasa-japan.com>

e-mail

info@rasa-japan.com

郵便振替 口座番号 0080-4-31185

受取人 特定非営利活動法人RASA-Japan

2018.3
Vol.27

2018.2.4~22

学校建設ボランティア活動のお世話をして

理事 本田直文

厳寒の名古屋を朝10:00に出発し18:00に現地に到着。学校に集まった学校関係者とホストファミリーの方々から熱烈的な歓迎を受け、我々に対する期待の大きさを実感しました。翌日からの建設作業が先方都合により遅れたため、大学生による日本語授業を予定より繰り上げて急遽実施。7班に振り分けされた大学生が高学年の生徒を対象に50分の授業を毎日二回行いました。各班が創意工夫を凝らした授業は大好評で、生徒全員が目を輝かせ必死になって授業を受ける姿はとても印象的でした。建設作業は連日30℃を超える酷暑の中、砂ふるい・セメント運び・ペンキ塗り等全員汗まみれになり作業に励

みました。単純な肉体労働ですが皆初めての体験なので楽しく作業できました。授業・作業共にリーダーとサブリーダーを中心に全員の意思疎通を図り、お互い納得できる方策を決め実行していきました。ホストファミリーの皆さんはとても親切で、家族は勿論近隣の方まで巻き込んで我々を家族の一員として暖かく受け入れてくれました。そこにはいつも楽しい会話があり明るい笑顔がありました。

現地での別れの日、ホストファミリーの「また帰っておいで」（注：また来てねではありません）という一言がいまでも脳裏に焼き付いています。

このボランティア活動は最高の体験をさせてくれました！

大学も学部も学年が違ってみんな仲良くなりました。日本を出るとき不安そうなあの顔つきがうそのようです。帰国したときの自信に満ちあふれた顔は本物でしょう。人生観を大きく変えた人もいました。RASAに参加してよかった。みんながそうささやいていました。



現地ワーカーと記念写真

だんだん校舎らしくなってきました



日本語授業の風景

感動の嵐が起きました

2018年春の建設ボランティア活動

帰国反省会で学生の声から

1) ホームステイから感じたこと {豊かさ} とは何か。物質面、ハートの面から

- ・心の面：豊かであると思った。常に近くに誰かがいる感覚があり、人生を楽しんでいる。物質的豊かさをそれほど重要視していない気もする。お金がなくても幸せを沢山感じる⇒人との繋がりが多いから。
- ・物を大切にする。生活の快適さを求めるよりも、娯楽を重視していた。ハートの面の豊かさを実感し、自分の心も浄化された。日本は近所付き合いが少なく、人と人との関わりが弱いから、ハートの面で豊かではない。それが普通だと思えば、豊かではないとは実感を持たない。
- ・フィリピンでは、日本のようにプライバシーを重視しておらず、物質的面で貧しいため、お互いが助け合って生きていくのが習慣になったのだと思います。一方、日本は物質面で裕福なため、家族や近所との繋がりをフィリピンほど持つ必要がないと思います。物質的豊かさは、とても幸せなことだけど、ハートの面の豊かさが、生きていくのに一番必要なものだと思います。

2) 活動から感じたこと 教育、授業、活動、行楽、ショッピングなど

- ・ホームレスや障害者が路上にいて、貧富の差が激しいことがわかる。家族に聞くと、貧しい人や弱い人を守るための政策がないからだという。
- ・フィリピンが、日本よりも家族や近所の人との関わりが密なのは、単に楽しいと言うだけでなく助け合わなければ、生きていけない状況があるからなのではないかと思った。
- ・同学年での年齢がバラバラ（6歳より遅く就学したり、落第すると同学年を履修する。）背丈や、体格に大きな差がみられ、家庭の経済の差が出ている。
- ・教室が足りないほどの子供がいて、教育を求めている。自分たちの事業に興味を持って臨んでくれるほど、学ぶことへの関心が強い子供が多い。
- ・生活面全てにおいて、時間の流れがゆっくりでのんびりしていた。
- ・ボランティアは、人を助けてあげることだけだと思っていたが、このような形で交流ができて嬉しかった。
- ・日本の子に比べフィリピンの子供達は自分から学びたいと言う姿勢が強かった。インターネットやゲームがない文化だからこそ、自分たちだけで楽しもうとしていた。だから仲が良くてコミュニケーション能力が高い。日本人に対して凄く興味を持ってきていた。
- ・英語も小学校5,6年生になるとある程度話せる子供が多く、日本の小学生ではできないだろうと思った。フィリピンの教育レベルは、自分の想像していたよりも高かった。
- ・フィリピンの人たちは素直な人が多く優しい。日本人よりも他人を思いやる気持を持っている。
- ・資源的な面では日本は勝っているが、人間の温かさの面ではフィリピンの方が豊かである。
- ・ボランティアとしてフィリピンに行ったが、逆にホームステイ先や子供たちから多くのものをもらって帰ってきた気がする。
- ・時間にルーズ。近所の人たちの関係が深く日本のように希薄ではない。夫が働き妻は働かない家庭が多い。
- ・学校の制度の違いに驚いた。小学校は、午前午後の2部制になっていて、十分に勉強できない状態だった。人々の生活は、日本とあまり変わらないように思われても細かなところ（家の設備やごみの問題）を見てみると、やはり先進国だなと感じる。子供たちが常に寄ってくる。日本の子供がこんなになついているのは見たことがない。遊びの少ないフィリピンの子にとって、日本人が来た事はとても面白かったんだと思う。

3) 日本との違い フィリピンの人の持っている 生活観、価値観、宗教観は？

- ・生活感：日本と大きな違いは無いが、日本よりも家族とのつながりが大きい
- ・価値観：LGBTQ（性的少数者）など多様性を受け入れている。幸せとは何か⇒お金、心の豊かさ
- ・宗教観：フィリピンはキリスト教が多く、教会が多く、日曜に出かける。他者の考えは否定しない。貴方の宗教はと聞かれ無宗教と言ったら大変驚かれた。世界的にも珍しいのだと思った。
- ・利便性よりも楽しさを重視しているところ。
- ・日本との違いとして、私が一番感じた事は、ゴミに対してです。日本ではしっかりと分別を行います。しかし、フィリピンでは分別も行われていません。特に子供たちは食べ終わったゴミをそのまま道に捨てていたりしました。そのため、ハエも多く臭くなっていたりして、環境に悪いと感じました。
- ・日本は消費をしすぎ。水、電気を使いすぎないように。

4) RASAの活動に参加して、自分改革に役立ちましたか

- ・自分が日本にいても経験できないようなことを肌で感じることで、価値観が広がった
- ・いかに恵まれているのかを感じることができた
- ・旅行でも留学でも味わえない体験
- ・教育を受けられるありがたさ⇒もっとしっかり勉強しようと会心
- ・家族の大切さを実感⇒自分も家族との時間を大切に
- ・日本は豊かになりすぎて逆に無駄が多いと気づいた
- ・世界の出来事を、他人事ではなく自分に関係することとして捉えられるようになった。言葉があまり通じない人とのコミュニケーション力を高めることができた。
- ・自分の価値観が変わった。人生において何が1番大事かというのを、改めて考えさせられた。
- ・文化の違いにも生で触れられ、違いを受け入れることもできた。RASAに参加してみて、改めて
- ・日本の環境の良さを実感しました。特に、スモークマウンテンを見たときは驚きました。この中で生活を行っている人がいると知り、世界には、過酷な状況の中で暮らしている人がいることも実感しました。今まで、実際に自分の目で見たことがなかったので、貴重な体験になりました。
- ・ホームステイも良い体験でした。実際にフィリピンの家庭に入ること、生活様式もわかりました。
- ・日本では近所の付き合いが薄くなっているの、見習う点であると思いました。日本では体験できない経験を行い、自分の成長に役立ったと思いました。
- ・私はRASAに参加して「自分もこうなりたいな」と思える尊敬できる人たちに会いました。RASAメンバーもホストファミリーも、みんなからたくさん良い刺激をもらっているんだと思う。
- ・フィリピンで貧困などを学ぶだけでなく、団体行動をどううまく進めていけるかなど、いろんなことを考えさせられました。フィリピンだけで終わるのではなく、今後の活動でも自分改革ができるチャンス、RASAは与えてくれているなと思います。これから楽しみながら頑張りたいなと思いました。

現地であったこと！ ボランティアの話から

今回子供たちと触れ合っている時、1人の子が私に近づいてきて、買ってきたばかりのフライドポテトを日本人の私と、周りの子供たちにも、配りました。それを食べた後、別の子が私にそっと耳打ちしました。「あの子は今日1日分の食事代を全部使ってしまったの。だから夜のたべものがかえないの。夕飯がないの。」えー！それを聞いて、私は言葉が出ない。自分のホストが私にくれたミリエンダ（おやつ）を、その子にそっと渡しました。自分のホストがせっかく私のために、用意してくれたものだったけど、ホストに気づかれないように、そっとその子に渡しました。その子は3か月前に、家族とマニラから引っ越してきたのです。日本人が来たというので、子供たちが集まってきていて、みんなと仲良くなりたかったのです。私だったら、自分の晩御飯を犠牲にしてまで、皆に配らないよ。と思いました。いかに貧しいか、日本では、考えられないくらいです。フィリピンの人は人のつながりを大切にしていますが、子供達も、それを自然に受け止めて、自分で考え行動したのでしょね。また普通にみられることで、子供が1個のまんじゅうをもらっても、周りに誰かいたら、決して一人で食べないで、分けて上げるそうです。



ボランティア学生と現地の子ども達とのふれあい



帰国反省会の様子

栄養失調児の給食支援活動

「手を貸す運動II」（代表佐藤正明様）から特別な支援を頂いております。
給食：貧困原因の欠食児童に給食。学校が対象児童を選定。年間5年生、6年生各50人合計100名。
経緯：2012から緊急支援的に民家で始まり、15年からは学校で全管理を引き継いでもらう。
内容：ごはん、野菜と肉(魚)のおかず、2016年から牛乳、フルーツ、2017年からビタミン剤、手洗い、歯磨き、祈り、整列、マナー指導。
活動場所：ラグナ州カブヤオ市サウスビル第1小学校(約5600人在籍)建物軒先が給食場所だったが、今年RASAが床や天井を張り照明をつけ台所改装など設備を充実。手洗い場も新設。
支援内容：対象児童に昼の給食の食材費、調理費用。現地調理奉仕者への給与もRASAより支給。

給食の受給児童からRASAへ作文が届きました

私は Almira R. Ocfemia です。

下に5人の弟妹がいます。しかしすでに一人は死にました。これがもとで、母は悲しみに暮れ気落ちしています。父もまた亡くなったのです。私たちは父の死後、悲しみが続いています。私たちの家族は貧乏になりました。父なしで生きるとはとても厳しいです。それ以来、母は家族のために立ち上がって働いています。母は家族の生活を支える唯一の人です。厳しいです。母は宝くじ販売を仕事としています。時々彼女は収入がありません。だから祖父に食べ物をくださいと頼みます。彼は木のスクラップを販売しています。もし祖父

にも収入がなければ、私たち家族も食べ物を買うお金がなくて、私たちはただ打ちひしがれて、寝るだけです。私の夢はいつかプロの踊り子になることです。私は実現したいです。私は学校での Feeding Program を大変ありがたく思っています。いつも食事が午後に定期的に食べられるように、私を支えてください。どうぞ私たちの学校を継続して援助してください。なぜならここではたくさんの子供たちが私と同じような状態だからです。神様があなたと貴方のスポンサーを祝福してくださいますように。力を貸してください。

私は Lika J Beates 12歳です。

私の今までの一生で最も幸せな瞬間は、両親が私たちに服を買ってくれたこと、そこで食事をした時でした。それはたった1度だけ、ちょっとの間だけでした。その一方今までの一生で一番悲しいことは、胃が空っぽのまま学校に行くことです。私は家で朝食を食べません。両親は私に、1日の食事代としてたった10ペソをくれます。父は建設作業員です。彼の給料は私たちの生活を支えるには全然足りません。時には家に食べ物ないことがあります。私たちは干物の魚または卵だけを食べるのです。

なぜならそれらは安価だからです。私はRASA-Feeding Program の支給を受けているメンバーの一人で大変幸運です。そのプログラムが私に毎日学校で健康的な食物を与えてくれることになっています。私は胃が空っぽになるかと心配することにはならないのです。毎日ビタミン剤をもらい、フルーツ、ミルクもいただきます。それらは私が成長し、大きくなって、丈夫になるような効果があります。私が大人になったら、先生になりたいです。そして私は両親を助け、私の家族の必要を満たし、子供たちに読み書きを助けたいです。

私は Princess Cheelene M. Gerte です。

12歳です。私は5人きょうだいです。両親には今のところ仕事がありません。時々母は家の前でバーベキューを売ります。私には父との異母姉妹があります。父は以前に嫌なことがあったといいます。時々私は学校に行く前に、食べ物が何もありません。母の収入だけでは、私たちの日々生きるための必要をととても満たすことはできません。このため、私は自分で勉強して、より良くなるようにもっと頑張りたいのです。私の夢はいつかシェフになることです。そしたら私は母を金銭的にサポートできるでしょう。特に今父が病気だから。父が病気なので薬を買うためにさらにお金

が必要なのです。時々私たち家族は隣人から食べ物もらっています。だから食べるものがあるのです。放課後、私は家事の様々な雑事をします。なぜなら私は母が食べ物を売ったり、収入を得るのに、できる仕事を探したりして、大変疲れているからです。私はだれか1日でもいいから、こんな状態の私の家族を助けてほしいです。私はRASAに大変感謝しています。というのは、私がお金を持っていなくても、食べ物がなくても学校に行けるからです。RASAのおかげで、毎日食事をもらって食べられます。

6年生の児童宅を先生（右2人。左）が、訪問 →
先生が児童宅を訪問しているところ↓



どぶ川の上に組み立てられた、地代がかからない児童の家。



ここが台所で、野菜が入った鍋があるだけ。
これだけが家族の食品で他に食品がない。



フィリピンはクリスマスは特別行事で、対象児童に行事給食



給食を食べる児童



教育省から表彰 2017.12 GoodWill Award
表彰の背景 給食児の栄養状態の改善と学力の向上成果



2018年度 主な活動予定

日程	活動	活動内容
4月	給食活動・学校建設 ボランティア募集開始	学校建設（2019年2月）50名を目標 給食活動（8・9月） 各8名～10名
4～通年	ボランティア体験発表会	南山教会などで学生有志が発表
5月26日	第9回定期総会	カトリック平針教会
6月2日	名古屋NGOセンター 海外ボランティア合同説明会	名古屋国際センター 体験者による活動発表と募集説明
7～12月	バザーによる募金活動	豊田スタジアム、南山大学 カトリック平針、港各教会
8～9月	給食活動スタディツアー	1回目予定（8月19日～26日） 2回目予定（9月2日～9日）
10月	ワールドコラボフェスタ	名古屋市栄オアシス21（2日間）
12月～1月	2019学校建設ボランティア活動 の研修会	参加者対象の事前研修会（3回） （参加姿勢、現地の理解など）
12月～2月	2019学校建設ボランティア	研修会 参加者対象の事前研修会 （参加姿勢、現地の理解など） 活動 2月3日から ブラカン州パンディー地区

ニュースレター第27号の発行にあたり

◆ 昨年2月、給食支援の現地を訪問したとき、幾人かの子供が食べ残しをしていました。もっと食べたらいいのにもったいないと思いつけを聞きました。「普段から食事をしていません。だから胃が小さくこれ以上は食べられません！でも、学校に来ればRASAの給食に与り確実にご飯がいただけます。これでだいぶ食べられるようになったのです。妹は学校に来る元気がなく家で寝ています。」自宅への食べ残しの持ち帰りは衛生面から禁止しています。私はそれを承知の上でその日のデザートバナナを2本そっとカバンに入れてあげました。「妹さんにネ！」最初は遠慮してか、うつ向いたままで困った様子でした。しばらくして私を見上げました。目に涙を浮かべて……。フィリピンには学校給食制度がありません。昼ご飯はお金がある家は5～10ペソ持たせて校門の前に来る移動販売の人からポリ袋に湯飲み1杯のごはん汁を入れて買います。サウスビル小学校ではそのような子供の数は限られています。貧しいからお金を持たせることができないからです。

◆ 今年の学校建設地はマニラから移住してきた人たちのために作られた学校です。この人たちは離れ島や田舎から豊かな生活を夢見て「都会に出れば何とかできる」と信じてマニラに出てきた人たちです。しかし現実には、住む家は勿論のこと仕事すらなく、他人の所有地に無断で住み着いたり、公共の空き地にバラックを作り雨露をしのいでいた人たちです。政府は彼らに安価で入居できる住宅を建設し半ば強制的に移住させたのでした。移住者のうちマニラで仕事に就いている人は家族だけ移住させ、自分は週末に帰宅するといった生活を送っている人が数多く見受けられます。学校周辺は移住者用の連棟住宅15,000戸で埋め尽くされています。全校生徒数は2,300名。先生の数が校長先生以下33名で午前の部と午後の部の2部授業体制です。ほとんど毎日のように移住者があるため、学童数もいまだに増え続けているようです。しかし、学校の敷地には限りがあります。RASAが今回建設した教室でほぼ埋まり、今後の増設は難しいかもしれません。

（藤井 典夫）